

2015年度特別研究期間 研究成果概要

所属・職・氏名： 文学部・教授・後藤 裕加子

研究課題：サファヴィー朝宮廷文化と都市

研究期間：2015年4月1日～2015年9月24日

研究成果概要（日本文（全角）の場合は2,000字程度）

イラン近世の王朝サファヴィー朝は、イラン高原を支配した遊牧系の王朝の伝統を継承しつつも、首都を中心とした都市を拠点に支配者が領域各地を巡回する支配システムを確立した。この支配システムにおける中央と地方との関係、そのなかから創出された都市文化などが、近年の主要研究テーマであり、この間に複数の学会や研究会で研究報告を行ってきたが、時間などの制約から、論文などにまとめる機会がないままであった。私は本2015年度春学期に特別研究期間をいただいたが、この研究期間では、これらの成果を文書として発表することにまず主眼が置かれた。

まずは、2013年に東京外国語大学で行われた国際シンポジウム *Mapping Safavid Iran* での研究報告、および昨年度に発行された『人文論究（関西学院大学文学部）』第64巻第2号に掲載された「サファヴィー朝後期のシャーの移動と「統治の館」」をさらに発展させた論文“Development of Transport and Growth of Cultural Homogenization in the later Safavid Period”を上辞した（Nobuaki Kondo (ed.), *Mapping Safavid Iran*, ILCAA（東京外国語大学アジア・アフリカ研究所）, 2015（予定）。この論文ではサファヴィー朝のシャー（王）が定期的な巡回の伝統を保持したものの、そこにはそれまでの遊牧民の慣習にもとづく季節移動から、統治の安定を目指して複数の「首都」の間をめぐる巡幸へと政策上の転換があったことを立証し、このシャーの巡回統治システムが国内交通システムの発展と連動し、宮廷で創出される儀礼や行事の地方統治者の宮廷への導入を促していたことや、これらの儀礼や行事が領域各地で行われることで住民のサファヴィー朝臣民としての自己認識共有に至ったことを明らかにした。

特別研究期間中にはそれまで手つかずであった史料の通読や読み直しも重要な課題であった。この作業のなかから、上述の研究を踏まえた事例研究として進められたのが、サファヴィー朝の最初の首都であったタブリーズの研究である。サファヴィー朝時代のタブリーズの研究については、同時代の史蹟が全く残っておらず、叙述史料や文書も限られることから、専門研究はほとんどない。特に「首都」でなくなり、知事に委託されて以降の同市の有り様については個別研究では全く論じられておらず、首都と地方都市との関係をさらに考察していく上で必須の事例研究と考えた。そこで今回はまずヨーロッパ・イラン学会第8回大会（於サントペテルブルク）で学会発表を行い、サーヒブアーバード広場を中心として形成されるタブリーズ市の中心の発展を論じ、これを第3の首都イスファハーン市の王の広場の先駆モデルとして提示して、海外の研究者の意見を問うた。これを踏まえて、今年度もしくは来年度中に日本の研究会で再度口頭発表を行い、その成果を論文として発表とする予定である。

これ以外の成果としては、やはりサファヴィー朝についてのドイツ語の専門研究書 Walther Posch, *Osmanisch-safavidische Beziehungen 1545-1550: Der Fall Alkâs Mîrzâ*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 2013 を英語で書評した。これは *Wiener*

Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes の本年度号に掲載される予定である。

今回の特別研究期間中は演習を2コマ担当していたこともあり、研究に専心するということはできなかった。それでも平常の学期期間中に比べれば学内業務の負担も少なく、普段はなかなか集中して読むことのできない史料をじっくり通読し、思索する時間を得ることができた。秋学期には通常業務に復帰するが、通年の委員会業務の多くを免除されていることもあり、時間に若干の余裕があるこの機会にさらにいくつかの作業を進行させていきたいと考えている。今回、貴重な機会を与えていただいたことにあらためて感謝したい。

研究成果概要は、データは gakunai@kwansei.ac.jp まで提出してください。